

おとめ ごころ
乙女のバカ心

ゆめ おとめ お
夢みる乙女ほど手に負えないものはない。

かのじよ じゅぎょうちゅう どうげこうちゅう でんしゃ
彼女らはいつもボーっとしている。授業中でも登下校中でも電車の

なか
中でも、すぐにボーっとしてしまう。

ゆめ しょうじょ じつ たいへん う
わたしが夢みる少女だったころも実に大変であった。生まれつきボーっ
としていたわたしが、日常生活に夢まで取り入れて生きた時期であるから、
そのボーっとし具合ときたら、水族館の水槽の中をグルグル泳ぐまぐろの
ようであった。

ゆめ しょうじょ しょき じゅうご ろくさい げいのうじん
夢みる少女の初期のころ(十五、六歳ごろ)、わたしはさまざまな芸人
ねつ あ はらたつり わたなべとおる しょうねん わかて
に熱を上げていた。原辰徳、渡辺徹をはじめ、CMタレントの少年や若手
わら ぶんや つぎつぎ す
お笑いスターまで、さまざまな分野にわたり次々と好きになっていった。

わたなべとおる か
渡辺徹にはラブレターまで書いた。

ゆめ しょうじょ こわ す げいのうじん じぶん
夢みる少女の怖いところは、好きになった芸人が、もしかしたら自分
ふ む おも こ
に振り向いてくれるかもしれない、と思い込んでいるところである。

わたなべとおる てがみ へんじ あ
わたしも渡辺徹がもしも手紙の返事をくれて、もしも会うことになって、
もしもつきあうことになったらどうしよう……と本気で心配しながらも期待

していた。

ファンレターを出してから三ヶ月後、わたしの期待とは裏腹に、商魂たくましいファンクラブの案内状が届いた。そのころから渡辺徹は太り始め、わたしの情熱も冷めていた。

芸能人に夢中になるのをやめたわたしは、理想の男を勝手に作り上げてはポーっとする、夢みる少女第二期に突入した。

ポーっとしている頭の中では、いつでもわたしの好みのタイプの少年が、かなり美化された私とつきあわされていた。

彼は背が高く頭がよく、芸能人にもいないほどすてきな顔立ちをしており、優しく誠実でそのうえお金持ちであった。現実にはいるはずもなく、万が一いたとしても絶対わたしなんかとつきあうはずはない。そんな男が空想の中ではわたしの思うままなのだ。

わたしの空想パターンはだいたい決まっていた。美化されたわたしは家柄まですり替え、良家の娘という設定になっている。わたしはおしゃれをしてたそがれどきの窓辺で彼を待っていると、間もなく彼はランボルギーニだかフェラーリだか知らないが、とにかく幻のスーパーカーに乗ってわたしを迎えに来るのだ。

このころからわたしは、^{ゆめ こい につきちよう}“夢みる恋の日記帳”^{につき}をつけ始めていた。日記と
いうよりは詩に近いが、それは読む者を^{し ちか}恥ずかしさ^{よ もの は}で^{しんかん}震撼させるパワーがあ
る。

^{きょう}
今日ね

^{ひさ}
久しぶりに

^{だいす} 大好きなあなたの^{ゆめ み}夢を見たの

ずーっと^{ゆめ}夢でもいいから

あなたといっしょにいたかったわたし

ばかっばかっ、こんなもん^か書いてたわたしの^{し へた}ばか。こんな詩に、下手なカラ
ーイラストまでつけてたのだから死にたくなる。

ところがこんなものを、二年半も^{か つづ}書き続けていたのだ。

^{とうじ}当時のわたしは、ちょっとどこかへ^で出かけるときも“もしかしたら恋の^{こい}チャ
ンスがあるかも”などと^{むね ふく}胸を膨らませて^{ある}イソイソと歩いていたものである。

^{ゆめ} 夢みる少女^{しょうじょだいさんき}第三期は、^{となりまち}隣町の^{しんがくこう}進学校に通う^{かよ}男子生徒^{だんしせいと}への^{ねつれつ}熱烈な^{かたおも}片思
いである。とにかく^{つうがくとちゆう}通学途中でも^{かれ}彼に^{であ}出会うとわたしの^{ぜんしん}全身の^{ちから}力は^ぬ抜け、
かばんを^おバタリと^め落としたり、^{まんが}クラッと^お目まいがしたりするのだ。よく、
などで^{おお}大げさに^{じゅんじょうしょうじょ}純情少女^{あか}が^お赤くなってかばんを^お落としたりするが、まさ

かそんなことがほんとうに自分の身の上^{じぶん み うえ お}に起こるとは思わ^{おも}なかった。

片^{かたおも}思^{きゆうそく}いは急^{かくじつ}速^{かねつ}に確^{かれ}実^{あたま}に加^{おとこ}熱^{おも}していった。彼は頭もよく男らしくハン

サムで背^せも高^{たか}い。こんなすてきな人^{ひと}は、どこを^{さが}探^{おも}してもいないだろう、この

人^{ひと}以外^{いがい}の男^{おとこ}と結^{けっこん}婚^{こん}なんてしたくない……。

早^{さつきゆう}急^{かんが}な考^{おも}えで思^つい詰^{かたおも}め、どうにもならない片^{なげ}思^{おも}いを嘆^{なげ}いてふろ場^ばでさ

めざめ^なと泣^ないたりしたものである。

さららももこ『もものかんづめ』^{しゅうえいしゃ}集英社より